

「人権って難しいなあ。分からないよ。」

初めはそんなふうに思っていました。一応、公民の授業で人権について学んでいたのですが、ある程度の知識はあるのですが、世界人権宣言の第一条で『すべて人間は生まれながらにして自由であり、尊厳と権利について平等である』と言われても、いまいちピンときません。教科書にのっているような差別や、新聞やテレビなどで報道されているようないじめを受けたこともなく、健常者として毎日何不自由なく生活している私にとって、『人権』という言葉は今までに考えたこともない、遠い存在でした。

そんな私が、最近人権について考えるようになりました。それは、車イスに乗ったある人との出会いがきっかけです。出会いといっても、私とその人の落とし物を拾い手渡しただけの、数秒の出来事です。

「ありがとう。」

と笑顔でお礼を言うその人は、とても優しくそうに見えました。

「あっ、この人普通の人なんだ。」

私はその時、ふとそんなことを思い、そしてあることに気がついたのです。それは、私が、車イスに乗っているということだけでその人を『障害者』と決めつけ、偏見をもって見ていたということ。私は自分が差別されたことはなくても、自分が無意識に差別をしているのではないかと、初めて考えるようになりました。

私は差別とまでいかななくても、人から好奇の目を向けられることがどんなことだかわかっているつもりでした。私には耳の不自由な祖父がいたからです。祖父が私を保育園に迎えに来てくれた時、

「由歌のじいちゃん、耳が聞こえないの？」

と口々に、めずらしい物を見るかのようにみんなが集まってきて、中には本当に耳が聞こえないのか試して遊ぶ子もいました。私はあの時とても嫌な気持ちになり、「じいちゃんは、じいちゃんだ。耳の聞こえない人でもなんでもない！」と思ったことを思い出しました。祖父は耳が聞こえなくても、私が身ぶり手ぶりで一生懸命に伝えるとちゃんとわかってくれました。普通に話ができるんです。心を通わせることができるんです。

私は車イスの人と出会い、差別や偏見は相手と自分の間に距離をつくり、相手の良さに気づけなくなるものだと知ることができました。そして、自分が無意識に差別をしていると知ったおかげで、幼いころに感じた「好奇の目が、どれだけ相手を嫌な気持ちにさせるのか」を思い出すことができました。それに私は、障害があっても祖父は祖父だという、何よりも大切なことに、改めて気づくこともできました。

障害があってもなくても、その人はその人です。視力の弱くなった人が、生活しやすいように眼鏡やコンタクトレンズをつけるのと同じ。耳が聞こえないから手話を使い、歩くことができないから車イスに乗るだけなんだと私は思います。困ったことや、不自由なことに対して改善のために工夫するということは、誰でも当たり前に行っているはずです。つまり、どんな人も『障害者』という言葉で表現されるべきではないと

いうことになるのではないのでしょうか？

そもそも『障害』という言葉自体、何かをするときのさまたげになるものに使ったり、心身が十分に働かない状態のことだと辞書にのっています。確かに、祖父との生活の中で大変なことはありました。でも、それは家族みんなで助け合えば、すぐに解決できました。それに、祖父には幼い私の世話をしてもらったり、助けられたこともありました。大切なのはお互いを理解し合い協力して生活していくということです。

私はいつか『障害者』という言葉がなくなればいいなあ、と心から思います。だから私は、もう二度と、誰かを差別したり偏見をもって相手をみないということを心がけて生活していきます。

人権は、難しくなんてありません。ただ気づかないだけで、意識すれば私たちのすぐそばにたくさんあります。私のように、「差別されたことはなくても、気づかぬうちに差別していたことがある」そんな人もたくさんいるのではないのでしょうか？

相手の立場に立って物事を考えた時、初めて人権というものが見えてくるような気がします。私はこれからもっと身近にある人権と向き合っ
て、誰に対しても平等に優しくすることのできる人間でありたいです。